

南無阿弥陀仏は  
私のいのち



平成27年  
11月号

NO.  
454

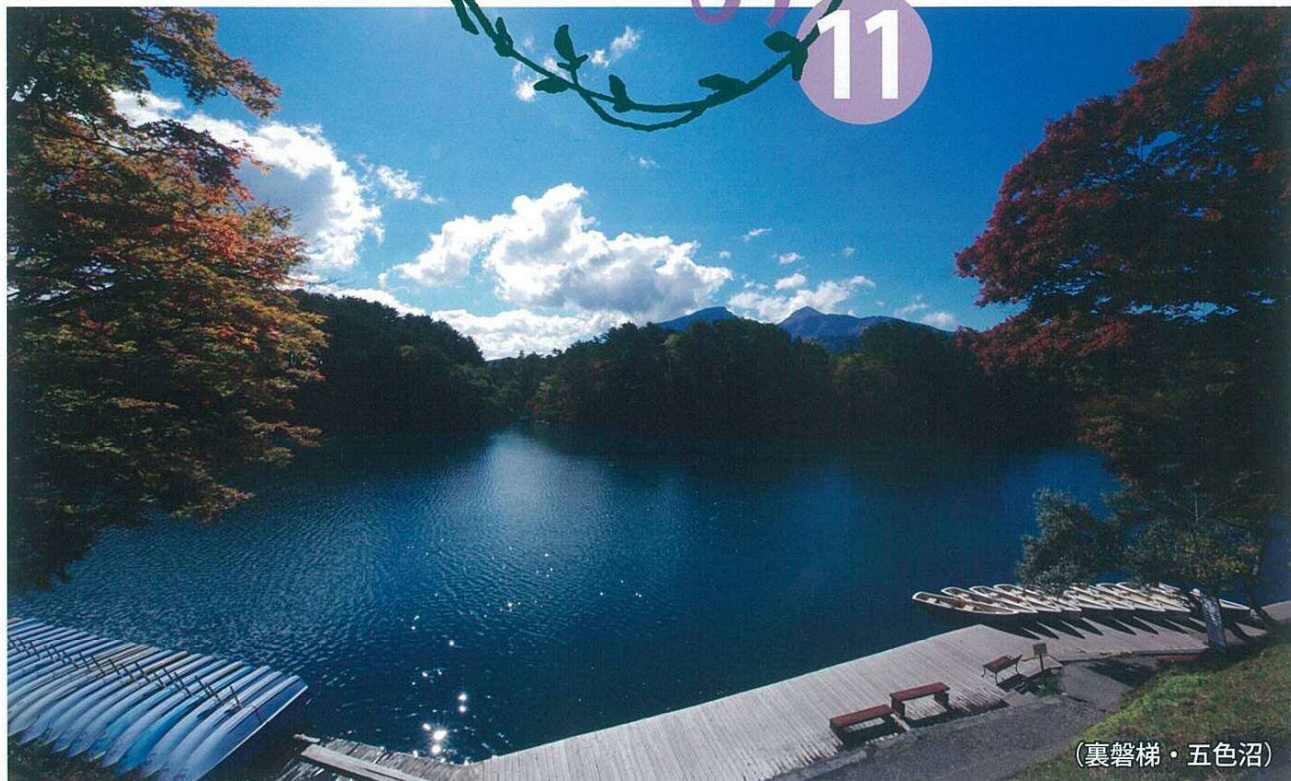
〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19

発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺

TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796

<http://saitokuji.tobihiro.jp/>

印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



(裏磐梯・五色沼)

## 如来の面目

年忌法要にお参りした際にご門徒さんから「姪の披露宴でスピーチを頼まれたが、大勢の来場者を前に狼狽えてしまい、まともな挨拶ができず面目を失った」という話を伺った。緊張のあまりしどろもどろになり、えらく赤恥をかかされたと嘆いておられた。

面目とは世間や周囲に対する対面・立場・名譽を意味するといわれるが、自分の力不足や手際の悪さで対面を無くしたり、他人との議論でやり込められ、恥をかかされると「面目が立たない」「面目丸つぶれ」などといい、挽回することを「面目躍如」といわれている。

しかし、『正法眼蔵』（道元禅師著）においては「自己の面目は面目にあらず、如来の面目を面授せり」とあり、本来の面目とは「本当の自分」や「ありのままの姿」ということであり、自分の分別や世間の評価ではなく、仏の智慧に照らされてはじめて気づかされる我が身の事実だと教えられる。

『観経』に「明鏡を執りて自ら面像を見るが如く」とあるが、自分の尺度で生きることが迷いだとは夢にも思わない、全く無自覚な私の闇を破り、凡夫という面目に目覚めさせるはたらきを仏の明境という言葉で言い表されている。

(木村 専正 記)

# 秋季永代経法要の報告

去る9月22日(火)、西徳寺本堂におきまして秋季永代経法要が勤まり、併せて木村主任、大谷義博住職代務より法話をいただきました。

『高僧和讃』の中の龍樹讃、「生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば 弥陀弘誓みだぐぜいのふねのみぞ のせてかならずわたしける」をご讃題としてあげられ、とくに生死ということについてお話いただきました。

大谷住職代務の法話では、書家の篠田桃紅さんの「103歳になって思うようにいかないことがわかった」という言葉に触れられ、私たちの生きている世界(忍土)は、どこまでも思うようにならない世界であると教えていただき、またどこまでも思い通りにしようとするのが、私たち人間のすがたであることも教えていただきました。

また8月に亡くなられたお同行について語られ、晩年、ひたすら聞法され続けた生涯に触れ、念仏申すとはどういうことなのか、念仏によってすくわれるとはどういうことなのかを、あらためて考えさせられたとのことでした。

念仏の教えは、人を通して学んでいくことがとても大事であると、ご本人も今回の永代経法要を通してあらためて思い直されたという言葉で、最後を締めくくられました。

(蓮井 邦宗 記)



# 親鸞さんのことば

無慚無愧のこの身にて  
まことのころはなけれども  
弥陀の回向の御名なれば  
功德は十方にみちたまう  
「愚禿悲歎述懐」

松井憲一

「18歳の娘は容姿にコンプレックスを持っていて。今朝も洗面所で髪の毛を整えながら、『あーあ、可愛く生まれたかったなあ』といっていた。そして、通りがかった私に『お母さん、どうしてそんな顔なん、迷惑！』と、私を全否定するのはたまげた。『そんなん知らん、文句があるならバアバに言ってくれ』と私も負けず応酬した」という新聞の投書がありました。『クソバアバ から生まれたのアンタです』という川柳もありました。一生に一度しかない今を受け取るとのことのできないわたしたちは、我と私の張り合い責任のなすり合いで苦勞しているのではないでしょ

うか。青年の頃に「旅をしてすばらしい景色に出会う、その時次に来るときは母と一緒に眺めようと思うのが人間である」と話された先生の言葉が、母の十七回忌に当たって、改めて思い出されます。母のことを気にしていたといっても、自分の子を思うほど母のことを思っていなかった自分に気づかされています。親鸞聖人は、ご自分のことを「無慚無愧のこの身にて」といわれます。「無慚」には、「テンニ、ハズルココロナシ」、「無愧」には「ヒトニ、ハズルココロナシトナリ」と左仮名で説明されます。そして聖人が引用される『涅槃経』には、「無慚愧は名づけて人と為す、名づけて畜生と為す。…慚愧有るが故に、父母、兄弟、姉妹有ることを説く。〔『教行信証』〕とあります。わたしたちは、父母、兄弟、姉妹は、生まれたときに決まっています、当たり前と思っています。もちろん生物学的にはそうです。しかし、お釈迦様は、父母、兄弟、姉妹は、天に恥じる人に恥じる心があるからあるのだといわれます。つまり、人と人との深い絆は、慚愧があるかないかによるの

であつて、父母に恥じる心のないものには、父母はあつてもないのと同じだということです。だから、無慚愧は、人の姿をしていても人とせず、畜生とすとまでいわれます。インドのマカダ国の阿闍世王は、父親殺しの大罪を犯して病にかかり、後に慚愧の心がでてきます。それを機に、お釈迦様のお弟子の耆婆が阿闍世のころの変化をとらえて、いままで自分の罪を認めなかった者に、慚愧の心がおこつてきた、それが大きなかわりめになりますと導いて、仏の教えを聞かせ自分を超えた信の世界を体験させていきます。その親殺しの阿闍世以下の自分だというのが、「無慚無愧のこの身にて」であります。それで、「無慚無愧のこの身にては、まことのころはなけれども」といわれます。あるのは恥じ知らずの身のみで、まことのころがありませんから、身近な人への要求も、思い通りにいかないときの排除も、その後に残る後悔も自分の思いの中でぐるぐる回る詮索に終わり、解決がありません。しかし、そのような者を知り抜いた上での「弥陀の回向の御名なれば」



「南無阿弥陀仏」の名号が響いて「まことのころなし」と頷く生き方は、廣大無辺で、とどまるところがありません。だから、南無阿弥陀仏の御名に賜る力に、疲れやあきらめはありません。それで、「弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまう」と、恥じ知らずの身に到り届いた南無阿弥陀仏は、「功德は十方にみちたまう」と、自分だけでなく自分のまわりにも波及して、一生に一度の今をそのまま頂ける尊い功德が「みちたまう」と讃えられます。

# 山門の言葉

## 中途半端だからこそ 私とは何かを考えてきました

おかのや  
岡ノ谷 一夫

子どもの時に感じた疑問を今でも覚えていたのだろうか。「なぜ水は下に落ちるのだろうか、なぜ人は眠くなるのだろうか。例を挙げればきりが無いが、ほとんどもう忘れてしまっているのではないだろうか。一方で、子供の時に「なぜ人間だけが言葉を使うのだろうか、言葉はなぜ生まれたのだろうか」と感じた問いに、今もなお向き合っているのが岡ノ谷一夫博士である。

岡ノ谷博士は小さい頃から生き物が好きで、シマリスを飼育していた。ある日、シマリスが飼育カゴから脱走してしまったとき、「お願いだから戻ってきてくれ！」と叫んだ。するとシマリスはくるりと反転し、カゴの中に戻って来たのだという。もつとも、シマリスが言葉を本当に理解していたとは思えない。「それではなぜ言葉が通じたのだろうか?」この出来事がきっかけで、博士は生涯を懸けて言葉に対する問題を抱えることとなったのである。

もちろん、すぐにそう定まったわけではない。博士は年月を重ねる中で、天文学者に憧れたり動物学者を志そうと

した。しかし、能力や努力が及ばないと諦めてしまった。先の言葉にあるように、博士自身が中途半端だと名乗るのは、どの仕事にも就けなかったことに對して述べている。

しかしだからこそ、自分が何者なのかを考えるきっかけとなった。多くの夢を諦めたからこそ、本当に自分が考えるべきこととは何かを考え、そして小さい頃に抱いた「なぜ言葉は生まれたのか」という問いを思い出したのである。言葉の問題を解き明かす未来が定まったから、今すべきことが明らかとなったのである。

私達は日常に起こる嫌な事や上手くいかない事を避けて、善い事や楽な事を求める。それは、何でも思い通りにしたい、否定されたくないからかもしれない。しかし、それは自分自身を考えないことである。壁にぶつかり悩むことで、初めて自分自身の姿に気づき、同時に今、何をすべきかがはっきりとする。嫌な出来事は、実は自分にとって大切なはたらきとなるのである。

(高橋 淳 記)



9月20日~26日	秋季彼岸会
9月22日	秋季永代経法要 法話 大谷住職代務 木村主任
9月27日・28日	宗祖忌
10月4日	城東ブロック会聞法会(小岩区民館 参加者 30名)
10月7日・8日	中興忌
10月8日	責任役員会
10月10日	同行会「現代の聖典」に聞く 法話 仲井 真裕
10月11日	中央ブロック会総会・聞法会(西徳寺 参加者 26名)
10月14日	『唯信鈔』に聞く(第16回) 講師 宗正元師
10月17日	定例聞法会 混声合唱団「エコー」練習

# おとしじ 婦人会だより

第314号

～標語カレンダーに聞く～(2015年10月号)

## 「世俗の論理の行き詰まることを 教えるのが仏法」

世俗の論理とは私たちが是非・善悪・損得感情の中で生活していることを教えて下さっています。少しでも平和で豊かに、そして幸せな生活を願ってこの論理を立ててきました。ところがこの感情は不都合な物や人を排除することで成り立っているのではないのでしょうか。これこそがこの私の身の事実であり、その止むことのない営みを「流転」という言葉で教えて下さっています。なかなかこの身の事実が目覚めない私たちに、日々の喜びや悲しみが「目覚めよ」と呼びかけているのではないのでしょうか。(山崎 哲)

### 次回聞法会ご案内

日時 平成27年12月16日(水)  
午後1時～3時  
場所 西徳寺 星月の間  
法話 標語カレンダーに聞く(真宗教団連合カレンダー)  
「十二のひかり放ちては あまたの国を照らします」  
代務住職 大谷 義博・山崎 哲

### 婦人会新年会のご案内

日時 平成28年1月10日(日)  
午前11時～午後2時  
場所 本堂(勤行・挨拶)、梅檀の間(懇親会)  
会費 2,000円  
申込開始 平成27年12月16日(水)  
申込締切 平成28年1月10日(日)

### 新会員紹介

栗原昌子様 江戸川区 (5班)  
山元美津江様 浦安市 (5班)

### ひとこと

高く澄みきった青空に白い雲の流れは美しく、時のたつのも忘れて見入ってしまう。葉鶏頭はげいとうの赤が陽に照らされて際立って見える。近くの「老人いこいの家」から「学生時代」の歌の練習が聞こえてくる。庭仕事の手を休め、何が起きるか分からない日常の中、穏やかな一時を過ごせる幸せをしみじみと感じる秋の一日…。

(吉川昌子)



(葉鶏頭)

# 掲示板 平成27年11月

- 7日(土)・8日(日) 報恩講(両日布教使 隅谷 俊紀師)
- 10日(火) 午後4時 総代会
- 14日(土) 午後1時 社交ダンス練習会
- 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
- 午後6時 同行会「現代の聖典」に聞く 法話 大谷住職代務
- 15日(日) 午後2時 城西ブロック会間法会(中野商工会館)
- 台東区合唱祭(混声合唱団「エコー」出演)
- 17日(火) 午後7時 仏教青年会報恩講 法話 鷺澤大雄師
- 18日(水) 婦人会日帰り旅行(高尾山方面)
- 19日(木) 午後1時半 『唯信鈔』に聞く(第17回) 講師 宗正元師
- 21日(土) 午後1時半 定例間法会
- 22日(日) 午後2時 城北ブロック会間法会(大塚・大和田)
- 28日(土) 午後6時 同行会「現代の聖典」に聞く 法話 山崎 哲

## えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしまして  
ありがとうございます。  
ご芳名の掲載をもって  
お礼とさせていただきます。

- 逗子市 西村 チエ 様
- 蓮田市 谷 久子 様
- 台東区 小林 浩子 様
- 板橋区 木下 好江 様
- 大和市 齊藤 祐三 様
- 世田谷区 山瀬 一枝 様
- 草加市 代田 勝子 様



## 中央ブロック会総会・間法会

10月11日、参加者26名のもと西徳寺・本堂にて総会・間法会が開かれ、会員さんの審議によって、無事に議事を終える事が出来ました。

本間明会長からは、「本堂の内陣にはどこに誰が荘厳されているか知っていますか?」と問いかけがありました。実は知っているようで知らないことがいっぱいある、そのことを一つずつ学びましょうとご挨拶をいただきました。

竹内乾一郎評議員会会長からは、仏法は誰かのためでなく、私自身のためにあるんだとお話しされました。私自身の為に説かれたお経を、何度も聞いていきましょうという言葉に、会員の皆さんは熱心に耳を傾けていました。

(高橋 淳 記)



## 合唱団「エコー」 東京藝大・奏楽堂で 歌います!

日時 11月15日(日)  
14時50分頃~  
場所 東京藝術大学・奏楽堂  
指揮 横山慎吾  
ピアノ 金澤麻里子

### 七つの子・夕焼小焼・浜辺の歌

今年で第60回目となる台東区合唱祭に、合唱団「エコー」は出場出来ることとなりました。本堂での練習の成果が十分に発揮できるよう頑張ります。入場無料です。沢山の応援をお待ちしております。



## 編集後記

椿は日本原産の植物であり、日本を代表する美しい花木です。園芸品種を含めて、世界中に200種類以上の品種があるといわれています。

椿の種からとれる油は、昔から食用や灯油、そして女性の整髪料として用いられてきました。花ごとポトリと落ちる姿に、私は儂さと潔さをあわせもつ、この花の強さを感じさせられます。

(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス:

[HP http://saitokuji.tobihiro.jp/](http://saitokuji.tobihiro.jp/)

ゆうちょ銀行お振り込み口座 00120-0-80670 名義 西徳寺

※「えこお」に対してのご意見・ご感想をお寄せ下さい。  
(メールでも結構です)

✉ [saitokuji@ce.wakwak.com](mailto:saitokuji@ce.wakwak.com)